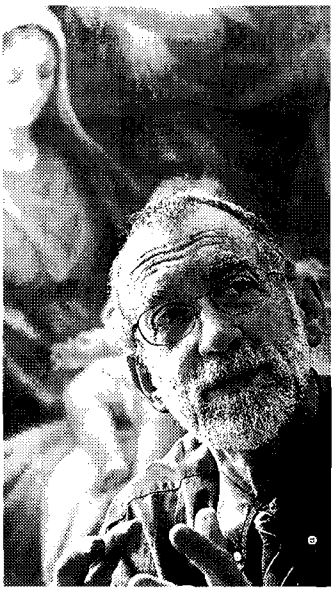
修復的司法の第一人者 ゼア氏が来日

加害者への理解深まる

従来の司法と「相互補完」

単眼複眼

犯罪の被害者と加害者の関係回復をめざす「修復的司法」の第一人者、ハワード・ゼア氏(62)が初来日した。従来の刑事司法の限界が指摘されるなか、修復的司法への期待は高い。一方で、被害者学や伝統的な刑法学の側からは「許し」「癒やし」の難しさが指摘される。「許せないとしても、加害者への理解が深まることに意味がある」と、ゼア氏は修復的司法の現実的な効果を強調した。柔らかな語り口には、実務家らしい説得力があった。



ハワード・ゼア氏＝東京都東村山市の東京聖書学院で、細川卓撮影

ゼア氏は米国のイースタンメノナイト大教授。78年から被害者と加害者の対話プログラムを実施してきた。90年に『修復的司法とは何か』を出版（邦訳は03年）、修復的司法（RJ）の理論的基礎を築いた。

ゼア氏は、従来の司法では満たされない被害者側の「本当のニーズ」を例を挙げて説明した。

あるレイプ事件の被害者女性は裁判の終了から何年も経て、加害者と会いたくなった。刑務所で面会すると、裁判では大きく恐ろしい男に見えた加害者は、年を取った弱くかわいそうな人に見え、「彼も同じ人間なのだ」と分かった。自分がどんなに苦しい思いをしたかも相手に伝えた。怒りが初めて消えた――。

「被害者には様々なニーズがある。加害者を知ることや責任を認めて欲しいと思うことは、その一つだ」

加害者もまた、従来の司法では真の説明責任を負っていないとみる。「刑務所は人が本当に悔いることを妨げる。罰による苦痛で加害者は自分がかわいそうになり、自分がやったこと、被害者に与えた傷を本当の意味では理解できない」

世論で強まる厳罰化を求める意見には「刑罰の犯罪抑止効果には疑問がある。人は衝動的に犯罪を起こすことが多い」と反論。死刑についても「人々は自らを処刑する側に置き、攻撃を受けた側が攻撃し返すことを無意識に正当化してしまう。テロリズムへの暴力による対抗が新たなテロを生むように、暴力の連鎖につながる」と訴えた。

RJと従来の司法との関係については「相互補完」を主張した。「RJがまず犯罪に対応し、解決できないものは罰金刑、それでも対応できないケースに懲役刑を与えればいい」

ゼア氏の言葉を裏打ちしているのは被害者、加害者と繰り返してきた対話だ。39人の被害者、58人の終身刑受刑者に取材した本も邦訳が出た（『終身刑を生きる』『犯罪被害の体験をこえて』）。ゼア氏撮影の写真も掲載されており、彼らの個性ある表情から、ゼア氏がそれぞれの物語に正面から向き合っていることが分かる。（赤田康和）